

する中でふれあいの機会を多く持つよう勧める。

### (3) 学校で

学年会、教科担任との連絡会などで、A子を含め予防的なかかわりの必要な生徒について、日常観察や心理検査の結果を参考に共通理解を深める。

## 7. 予防援助（指導援助）の経過

### 〔さりげないラポールの形成〕

・ 6月、日曜の午後「近くを通りかかったので」とA子の家を訪問し、留守番をしていたA子と話した。学校でと比較して、素直に感じられる。

### 〔学年での取り組み〕

・ 家族関係のストレスが予想される生徒について、学校で受容的に接し、特に「頭ごなしにしかない」ことに留意した。教師間で共通に理解し、心にふれていく指導を進めることにした。

### 〔家庭への指導援助〕

・ 7月、学期末考査中の月曜日、定休日のA子の父親を訪ねた。そうめんのつゆの作り方を教わりながら、A子の「不信感」について触れた。しかし、「気になるといえば気になるが、格別問題があるとは……」と、あまり心配していない。母親は、友達が変わってきたことと、男の声の電話があったことを少し気にしていた。

・ 夏休みに入って2日目、夜の9時を過ぎて、突然、A子の母から電話があった。昨日は8時、今日は9時半近くなくても帰ってこないという。駆けつけると、玄関で母親とA子が言い争いをしていた。A子は、昨夜は中学時代の同級生と公園で話し込み、今日はC子宅で何人かで集まっていたのだという。興奮した母親とA子に対し、明日、担任をまじえて話し合うことを提案し帰った。

・ 翌日、まずA子に「これまでお母さんがしてくれたこと」を思い出させ、母親の心配に気づかせた。また、A子には席を外させ、両親に対して、担任として抱いていた懸念について初めて説明し、親子関係診断検査を勧め実施した。その結果、拒否的傾向が高く、厳格、期待感などでも危険状態にあったことは両親にとって軽いショックだった

ようである。しかし、思い当たることも多かつたらしく、担任が〈ふれあい〉の必要を語ると、静かにならなづいた。

・ 8月になって、A子から暑中見舞いが届いた。家族で旅行をし、海の家から書いたものだった。

### 〔A子の新たな模索〕

・ 新学期になって登校したA子に、学校生活にも慣れてきたところで、なにか活動することを勧めた。しばらくして、A子はブラスバンドがやりたかったのだ、と打ち明けた。

・ ブラスバンドを始めたA子は、以前に比べて積極性が出てきたように思われる。明るく談笑するA子を見ていると、かつて心配したことが不思議に思えるほどである。

### 〔その後………〕

・ A子の態度には大きな意欲が見られ、成績も向上し、進路についても考えるようになった。また、両親とはその後も連絡を取り合い、A子を見守り続けている。学年会でも同様の生徒について気づきを深め、予防的にかかわることを取り決めた。

## 8. 考察

この指導援助は、本人に対してのかかわりだけでなく、家族に対してのかかわりを深め、ともに問題行動に至る要因を除去しようとしたものである。その要点については、以下のことが言える。

(1) 本人の心の不満感情を吐露させ、浄化させることによって、新たな目的意識に目覚めさせた。

(2) 本人の問題行動を誘発する可能性のあった家族関係の見直しを図り、一緒に行動することでふれあいを深めた。

(3) 両親に対する強い不信感を持つ本人に対して母親の愛に気づかせ、素直さを取り戻させた。

(4) 心理検査の活用によって、家族関係の問題点を適切な時点で気づかせることができた。

(5) 学校、及び学年の指導体制作りを、早くから行い、共通理解を徹底させた。

(6) 指導援助の終了後も、本人のその後を担任と家族で温かく見守っている。